

いた利他と正義の精神を、世界平和の実現に向けて普遍化しようとする新渡戸の姿勢が明瞭に読み取れる。

新渡戸は、クラークが示した人格を重視する教育の精神を、日本の教育現場や社会で実践するとともに、国際社会における平和や正義の理念にも生かした。両者に共通するのは、人間の尊厳を信じ、教育によってその心を高めようとした点である。知識や技能より先に、正義感、誠実さ、利他性を育むことこそ教育の根幹であるという理念は、現代の成果主義的な教育観とは対照的である。しかし、だからこそ今日的意義をもつ。競争や効率が優先されがちな社会において、クラークと新渡戸が示した人格主義教育の価値は、むしろ再評価されるべきである。

教育は心を変え、人間をつくり、ひいては社会を変える。クラークがもたらし、新渡戸が深化させた人格主義教育の系譜は、今なお私たちが立ち返るべき源流である。

＜お知らせ＞ この度、藤田正一名誉教授は、『クラーク博士と新渡戸稲造 クラーク博士篇』（税込1,980円）を出版されました。購入は、書店やインターネットで。

**緑陽中学校2学年「講話」11月実践報告  
～「Boys, be ambitious」の真意を推察する～**

生徒の思考や表現する場を設定した講話にどの学校からの要望があり、国語教材で既習の論理の展開の「演習編」と位置づけで、25分の説明に再構成し、講話を実施しました。

構成要点は、「仮説の設定・その論証・結論を導く」とし、先ず仮説設定のため“Boys, be ambitious”に続きがあることを紹介しました。“Boys, be ambitious like this old man”のthis old manはクラーク博士を指すこと、「この年老いた男＝私クラークのように大志を抱け」「大志の手本は私クラーク」ですとの一節から、仮説として「手本である博士の足跡をたどれば、大志を抱けの真意が見えてくる」ことを説明しました。

論証として：① 開校式の博士の演説：遠い異国への来日目的は、学校創立に最大の熱意で臨むとの「大志」、学生にはLofty ambitionを持って、

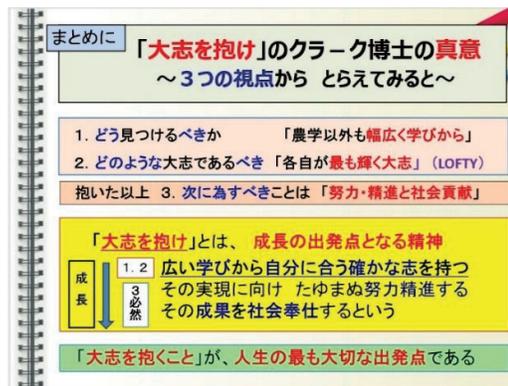
② Be gentleman：自主、責任、個の尊重（あらゆる場面での根幹の精神）、③ 新しい教育：思索的、科学的、専門外も含めた幅広い学び、④ 道徳教育（聖書）：平等、博愛（クラーク博士は奴隷解放の戦いの参戦した）、⑤ 博士の人間的魅力：課外活動（乗馬）、ノート点検、博士の官舎での触れ合い、⑥ 開拓使への無料奉仕：各助言（酪農＝肥料・甜菜糖推奨、交通の小樽ルート）

＜足跡から手本を整理すると＞ ① しっかりとした目的（大志）をもつこと、② 志の実現に向けてやり抜くこと（精進・努力・挑戦）、③ 成果を世のために尽くすこと（奉仕・利他の心）

クラーク博士は、「大志」→「精進・挑戦」→「奉仕・利他」を同時的に行った。しかし、教育者の博士ですから学生が一朝一夕で「大志を抱ける」ものでは無く、3カ年余の学びの中で獲得して欲しいとの意向であったろう。そこには「どう」見つけるべきか？「どのような」志であるべきか？が、内包されていると考える。

＜結論＞ ①「どう」見つけるべきかは、札幌農学校教育の幅広い学びの中から、②「どんな」大志であるべきかは、Lofty=各々最も自分に合った志（発展として）③「抱いて」の次のなすべきことは「実現に向けての努力・精進」で、「その成果を世のために尽くす」ことを期待していたはず。

**講話で使用したスライド**



＜博士の真意のまとめ＞「少年よ、大志を抱け」は、成長の出発点の精神であり、「大志を抱き実践した人は、利他の心を持つ人」になって欲しいことを伝えました。